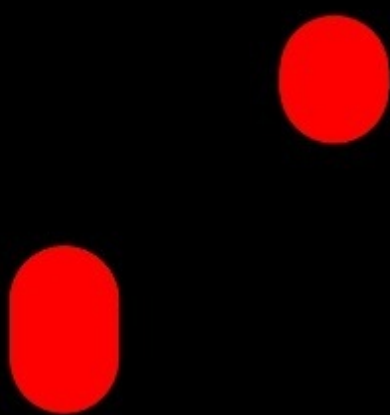


君はヒロインなんかじゃない



彼岸堂

それは、穏やかな、昼下がりのこと。

父が目の前で刺された。

何が起きたのかわからない。

父が、目の前で刺された。

何が起きたのかは、わからない。

確かここは日曜日。時間は街の大通り。私は中学2年生。

誰かが騒いでる。逃げろとか、救急車とか、警察とか、血が、危ない、逃げろ、誰か。

「お父さん？」

声が出た。いやにハッキリと聞こえた。ここに私はいたのだ。

うずくまる父。

明日は母の誕生日。

プレゼントはどうするの？

「お父さん？」

匂いがする。

肉の匂い。お魚の匂い。違う。これは。

怪我の臭い。

.....気分が悪くなる臭い。

「お父さん」

誰かが、誰かを、何か叫んでいて。それはまるで、映画のような叫び。

どうしてこんなにも父はうずくまって、芋虫のように、そして私を見ているのか。

「いやだ」

そう。そうだ。いやだ。こんなのいやだ。

だって、当たり前だ。理不尽だ。ひどすぎる。どうして。何で。何もしてないのに。ただ歩いていただけなのに。さっきまで笑っていたのに。なんで。なんで。

空は晴れてるし、ここは街の中。素敵な日曜日だ。仲のよい親子だ。幸せなんだ。

「やだッ！！！！」

誰か止めて。血を、時間を。変えて。無くして。誰か。

お父さんが。お父さんが、お父さんが。お父さんが――。

「僕が君の力になってあげられるよ」

「お誕生日、おめでとー！！」

クラッカーがはじけて、部屋に色とりどりの紙が舞う。

後で掃除が大変、なんて今日は言わせない。

お母さんの笑顔。お父さんの笑顔。私の笑顔。

素敵なケーキと、素敵なお馳走。私の後ろには、素敵なプレゼント。

最高の1日。

最高のパーティー。

「あやめ。あなた。本当にありがとう。私幸せです」

「やったな、あやめ」

「うん！」

そうここには。血の臭いなんてないの。

そう、この時間には幸せしかない。

お母さんとお父さんがいる。私もいる。もうすぐ生まれる新しい家族も。

素敵でしょう？

「素敵だね。あやめ」

(.....うん)

私の肩の上にいる奇妙な動物。

キュウベえは、口を開かずに祝福を発した。

今日は母の誕生日。そして。

魔法少女。高森あやめの、誕生日だ。

「あやめ。それじゃあもう一度確認するよ」

君の祈りはエントロピーを凌駕した。
君は、あの日起きた出来事を改竄するという願いを叶えた。
その代わりに君は、そのソウルジェムを手にした。

君の手の中で銀色に輝くそのソウルジェムは、君の祈りの結晶だ。

あやめ。君は願いを叶えた代わりに、魔法少女として魔女と戦わなければならない。
魔女とは何か。
君達魔法少女が祈りを象徴する存在なのと反し、魔女は絶望を世界に撒き散らす存在だ。
僕は君に、魔法少女としてその魔女を狩って欲しい。

大丈夫。
魔女は確かに恐ろしい存在だ。だが、魔法少女はそれを狩る確かな力を持っている。
それに、今もこの世界では君と同じように魔女と戦っている魔法少女達がいるんだ。
君一人が魔女全てと戦うわけじゃあない。

僕はしばらく君の側にしようと思う。
感謝する必要なんてない。
それが僕の役目なんだから。

さあ、早速魔女を狩りに行こうか。

.....こんな遅い時間に外に出て大丈夫かって？
なるほどね。明日の学校が心配だと。
大丈夫だよ、あやめ。君は魔法少女なんだ。
疲れを気にする必要なんてない。そういう力を得たんだから。

僕と一緒にいるから安心して。

――初めてが怖いのは、どの魔法少女も同じさ。

私は、漫画もアニメもそれなりに好きだ。
変身する可愛いヒロインに憧れた時期だって当然ある。

だから。
お父さんをお父さんのままでいさせるために、契約することなんて。
戦う運命なんて。
全然怖くなんかなかった。

「あやめ！ 魔女がこっちを見ている！ 君の力を形にするんだ！！」

可愛らしい声が、可愛らしくない叫びをあげている。
それが私へのものだと、気づいたとき。
目の前の光景がリアルだと、そしてリアルじゃないリアルだと、気づいた。

蠢く目。蠢く手。無数の視線。無数の指。
私たちと『何か』を一枚隔てた世界に生きている、化け物。
不気味で、気持ち悪くて、グロテスクで、どこまでもカラフルで。
何か食べてるし。
何か、見覚えのあるものがぶら下がっているし。
あれはどう見ても――

「あやめ！！」

身体が意図せずぐわんと大きく揺れる。
直後、おなかの辺りで熱い何かが走り、更に押し寄せてくる。
痛み――。

「―――ッ！？」

息ができない。

苦しい。痛い。痛い。助けて。

「落ち着いて！ ただ突き飛ばされたただけだ！ 早く立って体勢を立て直さないと次が来る！！」

突き飛ばされただけ？

突き飛ばされただけってどういうこと？

痛いよ。そんなこと言ってる暇ない。

——影が私に落ちる。

「あやめ！！」

痛い。痛い。痛い。

痛いけど、痛いから。

死にたく、ない——。

そう思った瞬間、ふっと痛みがおなかから消えた。

上から落ちてくる無数の腕の塊。

「潰される」と思って、私は慌てて立ち上がった。

立ち上がったつもりだったが、どういうわけか地面を吹き飛ばして跳んでいた。

眼下に、化け物とキュウベえが見える。

(あやめ、わかったかい。今の君の身体能力は常人を大きく上回っているんだ)

キュウベえの声が聞こえる。

そうだ。私は魔法少女。

戦えるんだ。

変身した私。強い私。戦える私。

祈りを護る私！！

(あやめ！ 君の力を、武器を出すんだ！)

——武器。

出せる。今の私なら。

あの化け物を倒す武器を。

右手に確かな感触。見ると、何時の間にかそこには、確か薙刀と呼ばれる武器が存在していた

。

重力に従って地に降り立ち、棒切れのように軽い薙刀を両手で握る。

化け物が、こっちを見た。でももう怖くない。

だって私は魔法少女なんだから——！！

「怖くなんかない！！」

薙刀を振ると、それに合わせ薙刀の刃が伸び、化け物の身体に入ってく感触がした。

このまま振り切ろうとしたが、骨のようなかたいものに当たり、いくら力を入れてもそれ以上進まなくなる。

化け物がこちらへ刃を入れたまま近づいてくる。

「く、るなあっ！！」

無理やり刃を引き抜いて、もう一度振り下ろす。化け物の肉を裂くが、また途中で止まる。

引き抜く。下ろす。止まる。引き抜く。下ろす。止まる。引き抜く。下ろす。止まる。下ろす

。下ろす下ろす下ろす。

破壊する。

挽肉。

「あやめ」

はっ、と。

何時の間にか足元にキュウベえがいた。

「もう、倒したよ」

見ると私の身体も、私の武器も、すべて血に塗れていて。

目の前にもうあの化け物はいなくて。

代わりに小さな小さな黒い宝石のようなものがあって。

「君の初討伐は成功したんだ。お疲れ様。頑張ったね！」

視界が揺らめく。

夜の街の風景が取り戻される。

深夜の静けさ。

私は、座り込んでしまった。

そして、静かに。

ご馳走を地面にぶちまけた。

.....それから、少し。

キュウベエの言うとおりに、怖いのは最初だけだった。
もどしてしまったのも、3回目まで。

それ以降は、何の問題も無い。
何も怖くない。
負けることもない。

痛いのも、慣れた。

戦えるんだって、気づいた。

お母さんとお父さんも笑顔のまま。
私の日々も変わらない。
幸せな日々は続く。

怖くて泣いてしまうことは、数えるのを諦めるぐらいに多いけど。
でも。
あの時お父さんを失うよりかは、一億倍マシだった。
きっとあの時契約しなかったら。
お母さんは涙を流し、私も涙を流し、苦しみ、痛み、日々に影が差し、そこには希望なんかなくて。
幸せなんて言葉は迷子になって。
きっとどこまでも救われない日々が続いていたはずだから。

私が戦うことで護れる幸せがある。
シンプルでわかりやすい。目に見える。だから頑張れる。戦える。

.....そして。

私が恐怖を抱かなくなり、進んで魔女を倒しにいけるようになった頃から。

キュウベえは姿を見せなくなった。

魔法少女になって一つだけ辛いことがある。

それは、距離だ。

私は周りに距離を感じ始めていた。

私が昨夜「死ぬかもしれない」と恐怖しつつ戦いを乗り越えても、当然友達はそのことを知らない。

誰一人労いの言葉もかけないし、感謝なんてするわけがない。

それは、お父さんとお母さんも同じ。

朝、私が疲れていても、風邪程度の心配しかしない。

娘がいつ死ぬかもわからない場所にいるなんて知るわけがない。

私だけ違う世界にいるのだ。

道行く人すべて、遠い国の人間に思える。

魔女に常に命を狙われているなんて誰も知らない。

平和が当たり前で、幸せが当たり前。

魔法少女達が今も血を流して戦っているなんて、誰も知らないのだ。

辛い。

私が、魔法少女として慣れと落ち着きを得るに連れて、それは顕著になっていった。

明日の命の心配もしないで、バカみたいにヘラヘラと笑って。

どうして自分が死ぬことを想像しないの？

どうして、もっと命を、時間を、家族を、身の回りの全てを大切にしようと思わないの？

「いけない」

気が滅入りそうになる。

時たま、思考がひどく荒んでしまう。

こういうとき、ソウルジェムは大抵濁っている。私の祈りの結晶は、私の心を反映しているのだろうか。

「私が選んだ。自分で選んだんだ」

部屋で一人、ぱんと頬を叩く。
魔女は今日も人の命を狙っている。
戦わないと、いけない。

その日の魔女は、今までになく手ごわかった。

「っ、また見失った……！！」

姿が消えては、突然現れ、まるで幻のように私を翻弄してくる。
こっちの攻撃は空を切るばかりで、手ごたえが一切ない。

(どうすればいいの！？)

魔女のくもぐった笑い声が聞こえてくる。
それが、四方八方から。
やがてそれが、声のように聞こえてくる。歌とも言える。

こわいよね
つらいでしょ
こわいよね
いたいでしょ
さみしいな さみしいな
あそびましょ
なきやむまで
さけびましょ
きこえるまで
ともだちね ともだちよ

「く、う」

不安感が湧き上がってくる。胸を掻き毟りたくなる。切ない。痛い。
勇気がなくなってくるのを感じた。
視界がぼやける。眩暈がしている。このままでは倒れる。

――その時。

轟音と共に、地面が揺れた。

見ると、私の真正面に巨大なハンマーが振り下ろされていた。

それが地面を叩いた衝撃は、波となり、歌をかき消し、そして。

つんざくような、人間離れした悲鳴が背後から響く。

――魔女が、そこにいた。

私は反射的に魔女に薙刀を向け、刀身を伸ばし、貫いた。

魔女はそのまま地面から離れ、私の刃で宙に吊るされる形となり、びくんと大きく振動し、やがて霧散した。

結界が崩れ、魔女からグリーンフシードが落ちる。

「……倒せた……」

「危ない所だったね、あやめ」

聞き覚えのある声が頭の中で響いて、振り向く。

見るとそこには、私を魔法少女へと導いたキュウベえと。

さっきの巨大なハンマーを片手に持つ、同じ年くらいの女の子がいた。

あやめ、紹介するよ。

この子は安西ともみ。お察しの通り、君と同じ魔法少女だ。

彼女はついこの間契約したばかりでね。この街にも来たばかりなんだ。

どうも、君と同じ学校に転校する予定らしい。

ともみは魔法の探知にちょっとした才能があるんだ。来て早々、別の魔法少女の危機を嗅ぎ取ってね。

この街の魔法少女と言ったら君しかいないからね、すぐにわかったよ。

「はじめまして、あやめさん」

ともみと君は、歳も同じだし、何より実力も近い。

紹介しておいて損はないかと思って……………あやめ？

「あ、あやめさん？」

……なるほどね。

あやめ、一人で戦うのは辛かったんだね。

でも、良かったじゃないか。

これで君は一人じゃなくなった。

これからは二人で頑張っていくといいよ。

「……よろしくね。あやめさん」

ともみと私が仲良くなっていくのは……当たり前のことだった。

祈りと絶望の戦いを知って、それを一人で抱え、先の見えない闇に飲まれていく恐怖を、私達は知っていた。

共有できた。

怖くなかった。

背中を預けあった。

一緒に泣いた。

手を繋いだ。

笑いあった。

励ましあった。

頑張ろうって。

痛くないよって。

一人じゃないからって。

周りのみんなは不思議がっていた。

出会って間もないはずの私達が、クラスの、学校の、誰よりも仲良い友達同士に見えることが

だって当たり前。

私達は同じ痛みを二人で抱えているんだから。

私達は、一人じゃないんだから。

苦しくても、それを共有できる友達がいる。

こんなに幸せなことはない。

「ともみ。ずっと友達でいよう。ずっと一緒にいよう」

「うん。ずっと一緒に、ずっと友達だよ。あやめ」

ずっと。

変わらないものがある。

ありがとうキューベえ。
私は、もう大丈夫だよ。

ある日ともみが、自分が契約した理由を教えてくれた。

「弟が、事故で目を覚まさなくなったの」

彼女がいつも通りの日曜日を過ごしていたとき。その報せは唐突に訪れたそうさ。

「ミニバスの試合でね。ちょっと遠くまでクラブの子達と行ってたときだった」

死者も出た大きな事故。

ともみの弟は、命だけは救われたが、いわゆる植物人間になってしまうことが医者から宣告されたらしい。

「朝はあんなに元気だったのに。包帯まみれで、息しかしてなくて」

ともみの眼には、弟の命を繋ぐ無数の管が、化け物の触手にしか見えなかったようだ。

「ママとパパは、ケンカばかり」

幸せと笑顔に溢れていたはずの家庭が、粉々になった。

ともみは、生きているのが嫌になってしまっていた。

「そんなときにね。キュウベえが現れたの」

私のときと同じように。

「……弟が目覚まして、怪我も治ってから……あの暗い日々が全部なくなった」

幸せが、再び。

「だから、ね。大丈夫。今はもうあやめもいる。大丈夫なの」

「うん」

そうだ。

だから、私も話した。

私が契約した理由を。

「……辛かったね」

「うん。私よりともみの方が辛かったはずだよ。だって、私は、辛くなる前になんとかあったんだから……」

ともみの手をそっと握る。

ともみが、きゅっと握り返してくる。

私達は魔女の血に塗れていて。

それでも、ともみを抱きしめるのに躊躇いなんてなかった。

「……一人じゃない」

「うん」

「一人じゃないね」

「うん」

変な方向に曲がった私の脚と、抉れてしまったともみの右腰が元に戻るまで。

こうして。

私達はうなずきあった。

抱きしめあった。

「……あ、ごめん」

返事が弱々しかった。
顔色も悪い。

「大丈夫？」

「……うん。あはは、ちょっと疲れちゃった……」

結界が解れ、破れる。
しかし、求めていたグリーンシードはどこにも落ちていなかった。

「ねえ。ソウルジェムは……」

「ん、大丈夫。大丈夫だから」

「でも」

「大丈夫だって」

少し語気が鋭くて、思わずびっくりしてしまった。
するとそんな私を見て、すぐに謝ってくる。いや、謝るというよりそれは、異常なほどの。

「ごめんね。ごめんねごめんねごめんね。嫌いにならないで。ごめんね」

……きっと疲れているんだ。
私はそう思うことにした。

ざあざあ。

ざあざあ。

私は、何度も何度も、振り下ろした。

ざあざあと、雨の中で。何度も。

黒い。

靄がかかっている。

見えない。

何故、こんなに、必死に殺そうとしているのか。その理由も。

目の前も。

靄がかかっているのだ。

ざあざあと。

焼きついて離れない。

ざあざあ。

それが、血なのか。

雨なのか。

私は、地面に全てを吐き出した。

あやめ。

無駄なことだってわかったかな。

僕をいくら殺したって、何の解決にもならないんだよ。

それに、君が本当にしたいのはこんなことではないんじゃないかな。

理由が、聞きたいんじゃないかい。

まあ、でも。

君のような子を何人も見てきたからね。予想はつく。

君がとっくに、何が起きたのか気づいていることに。

でも君は。

というより『君達』は、聞かずにはいられないんだろうね。

説明をしなかったのは、聞かれなかったからだよ。

ただし誤解しないでくれ。僕たちはそうなることを目的としていたわけじゃない。

……まあ、今の君に説明をしても恐らく理解は得られないだろうけれど。

あやめ、僕は数え切れないほどの魔法少女達を見てきた。

その上で言わせてもうとね。みんな同じなんだよ。

君達は戦いの運命を受け入れた。そうまでして叶えたい願いがあった。そしてそれは、確かに遂げられた。

つまりは、君達自身の選択だったんだ。君達もそれに満足していたじゃないか。

だというのに、必然性を持つ結果に対して他者に憎悪を向けるのは明らかに不自然だと思うなあ。

まあ、それもまた必然なんだろうね。

やれやれ、今日だけで君は僕を何回殺すつもりだい？
いい加減街中を彷徨うのも面倒だろう。
悪いことは言わない。もう無駄だと悟ったほうがいい。
まあ、聞き入れてはくれないのだろうけどね。

.....あやめ。

君はいずれ知ることになるよ。まだ良い方だったと。
だって、彼女の願いは君によって護られたのだからね。

今日は、私の誕生日だ。

学校が終わったあと、父と母と、駅前で待ち合わせをしている。

最近、周りの人が私に話しかけてこない。

同情して、なのかは知らないけれど。

少し、ありがたかった。

今何か話しかけられたら、私はきっと怒り散らして、泣き喚いて、周りを傷つけてしまうからだ。

.....最近空の青さが鬱陶しい。

笑顔を、見たくない。

いつか感じていたあの感覚が、また私の中で蘇っていた。

『今日は、素敵な誕生日にすることをお母さんと保障します！』

お父さんのメール。

私が救ったお父さんからの、似合わない絵文字の混ざったメール。

.....もうすっかり身重なお母さんと、なにやら計画して。

そんなに私、二人に心配かけてたんだなって。

笑っていなかったんだなあって。

どうしてだか、他の人の『気遣い』がわかってしまう。

痛い。

.....ざあざあ。

雨がちらついている。音が聞こえる。声も。

もう、魔女なんか、魔法少女なんか、知らない。

私は戦わない。

生きるんだ。

お父さんと。お母さんと。ずっと。生きていくんだ。

そうだよ、どうして戦わなきゃいけないの。

勝手に死ねばいいじゃないか。魔女に食われて。私の周りが無事ならいいじゃないか。何で見知らぬ人のために私が命をかけないといけないんだ。そうだ。そうだそうだ。いいんだ。誰も褒めてくれないし。誰も励ましてくれないし。誰もいないし。

お父さんとお母さんと私と、妹がいればいいじゃないか！！

そうだ！！！！

ああ！ 空が、こんなにも青い！

気づけば駅前だ。足取りが遅すぎて、待ち合わせの時間より少し遅れてしまった。

お父さんとお母さん、心配してるよね。

大丈夫。

素敵な誕生日にしよう。

『魔法少女じゃなくなった私』の、素敵な誕生日にするんだ！

ほら、向こうにお父さんとお母さんを見つけた。

向こうはまだ気づいていない。

こっそり近づいて、驚かせちゃおうかな。

待っててね。すぐいくからね。きっとね。

.....厄介な相手だったね。

周りの空間で発生した『事実』を捻じ曲げる、なんてなかなかない珍しい能力だよ。

でも、君はそれを見事打ち破った。

今だから言うよ。

正直、君が負けると思っていた。

君が結界に取り込まれた直後の精神状態は、どう見ても戦える状態じゃなかったからね。

でも君は突然立ち上がった。

驚いたよ。

僕は君が同じ道を辿るものだと思っていたからね。

でも君は、結界を進んでいく度に、何も言わなくなり、何も迷わなくなった。

魔法少女は条理を覆す存在。これは確かに僕の言葉だったが.....君は正にそれを体現したと言えるよ。

手ごわい能力を持っていたというのに、君は、実に的確に弱点をついた。

もし僕に感情があったら、真の意味で『驚いて』いたのだろうね。

それとも、これは必然だったのかな。

君が一番近しかったわけだし。

「ところで、君はその魔女の欠片で何をするつもりだい」

「あんたには、きっとわからないわよ」

「.....無駄だとは思いますが忠告するよ。そんなことをしたら、君は死んでしまうよ。ともみ」
「死にたいのよ。だって」

ざあざあ。

「ずっと一緒にいるって、約束したから」

「.....まったく、君達人間は本当に、わけがわからないよ」